

医師への『先入観』や『恐れ』など
わきに置き、仕事を
まっとうしてほしい。



東京大学医学部附属病院病院長

瀬戸 泰之

病院長でありながら外来を受け持ち 薬剤師ともアクティブに協働する

東京大学医学部附属病院（以下、東大病院）の病院長のイメージは、若干オーバーではあるものの「殿上人」。取材の申し込みをしておいて誠に失礼なのだが、現場で働く薬剤師についてどこまでのコメントをいただけるのか不安に思っていた。しかし、目の前に現れた瀬戸泰之氏を見て、いらぬ懸念は吹っ飛んだ。取材スタート時間のギリギリに院長室に入ってきた彼は、肩で息をしながら「すみません」と詫げる。聞けば、外来患者の診察が延びてしまったのだと言う。

つまり、瀬戸氏は東大病院の病院長という要職にありながら、胃がんや食道がんの専門医として現役でバリバリと働く臨床医でもあったのだ。当然なが

MY OPINION

明日の薬剤師へ

構成／武田 宏 取材・文／及川 佐知枝 撮影／林 溪泉

ら、薬剤師との協働もアクティブに行っているらしく、そのあたりの質問を投げかけると打てば響くように答えが返ってきた。

「ほんの20年前、がん治療と言えば、手術か放射線治療でしたが、近年はいろいろな薬剤が開発され、薬物治療ががん治療の大きな柱のひとつになっています。薬物治療の初期こそ、外科医が片手間に手がけていましたが、大きなウェートを占めるようになって今では、腫瘍内科医も少ない日本では、その分野は薬剤師に頼らざるをえません。

したがって、薬剤師は医師がオーダーした薬剤を調剤して患者に渡すのが主な仕事と思われがちですが、現在では、少なくともがんの領域では、治療に参加し、医師からの薬物療法の相談に乗る、なくてはならない存在になっています」

瀬戸氏は、「医療安全の面でも薬剤師の存在は大きくなっている」と語る。

「以前、抗がん剤の過量投与で残念ながら患者さんが亡くなってしまった事例が報道され、世の中で大問題になりました。それ以降、薬剤師の役割がより重要になったことは間違いありません。抗がん剤以外の薬物療法でも同様であることは、容易に推測できます」

キャンサーボードにおいて 薬剤師の参加は、今や当たり前

「薬剤師の存在の大きさを実感した具体例はあり

ますか？」との質問にもよどみなく答えてくれる。

「キャンサーボードをご存じですか？手術、放射線療法及び化学療法にたずさわる専門的な知識及び技能を有する医師や、その他の専門医、メディカルスタッフなどが集まって、がん患者の症状や状態、治療方針などを意見交換、共有、検討、確認等をするためのカンファレンスのことを言います。

おそらく日本では、癌研究会附属病院（当時）が有明に移転したタイミングで、米国で行われていたキャンサーボードをいち早くとり入れました。それが15、16年ぐらい前の話です。ただ、当時は、まだ薬剤師は、その場にいなかったのですよ。

今やキャンサーボードは珍しくなくなり、多くの病院で導入されていますが、僕が知っている限りでは、薬剤師の参加は当たり前になっている。もちろん当院では、薬剤師の参加は必須で、重要な役割を担っていたಿದೆいます」

一連の話を聞いていて、瀬戸氏の薬剤師への深いリスペクトを感じた。

病院の意思決定をする執行部に 薬剤師の部長を迎える人事を

彼の薬剤師へのリスペクトを証明するひとつが、薬剤師部長が同院の少数精鋭で構成される執行部の一員となっていることだろう。瀬戸氏が病院長に就任する際、たつての望みでそのような人事がなされたという。見まわしても、病院の意思決定をする会議

PROFILE

せと・やすゆき

1984年 東京大学医学部医学科卒業
中央鉄道病院麻酔科研修医
東京大学医学部附属病院第一外科研修医
1985年 関東労災病院外科医員
1987年 医療法人明和会中通病院外科医員
1988年 東京大学医学部附属病院第一外科医員
1992年 国立がんセンター癌専門修練医（胃外科）
1993年 東京大学医学部附属病院第一外科助手

1998年 東京大学医学部消化管外科（胃食道外科）講師
2000年 医療法人明和会中通総合病院副院長
2003年 癌研究会附属病院消化器外科医員
癌研究会附属病院消化器外科医長
2005年 癌研究会有明病院消化器外科副部長
2007年 癌研究会有明病院消化器外科上部消化管担当部長
2008年 東京大学大学院医学系研究科消化管外科学教授
2019年 東京大学医学部附属病院院長



に薬剤部がかかわるケースは、まだまだ少ない。

「僕からすれば、大切な病院の意思決定の場に薬剤部の責任者を参加させないほうが不思議です。薬剤の進歩が著しく、しかもさまざまな種類が発売されている現在、医師が薬剤の網羅的知識を持つのは不可能で、治療において医師の相談相手として薬剤師の存在は絶対。さらに、そのような状況ですから、必然的に使う薬剤の種類や量は相当なもので、病院経営にも大きくかわる。

病院の治療や経営方針などを決める際、薬剤部の意見は、どうしても聞いておきたいところですし、逆に決められた方針を薬剤部でも共有してほしい。そうであれば、薬剤部長を執行部に迎えないわけにはいかないでしょう」

院長就任前には、薬剤部を訪れ メンバーたちのやる気を引き出す

そんな瀬戸氏であるから、薬剤師への期待は大きく、同院の薬剤部のメンバーたちを鼓舞することも忘れない。病院長就任前には、薬剤部を訪れ、挨拶を兼ねて病院の方針を率直に話すとともに、がん治療でチームを組んでいる薬剤師の名前を挙げて激励の言葉を贈ったそう。

「病院長職に就いてしまうと、残念ながら忙しさのあまり、若い薬剤師にはなかなか会って話す機会を持てません。ですから、就任前、このときとばかりに、僕の考える医療、病院経営のめざすところを話

させていただきました。

また、がん治療で協働している薬剤師の名前を挙げて、具体的な事例を引き合いに出し、どのような部分で助けてもらったかを感謝の気持ちも込めて紹介しました」

最後には「ますます、がんばっていただきたい」とのメッセージを伝えたと言うが、単なる形式的なものではなく、薬剤師の仕事を本当によく理解していることがわかる挨拶は、薬剤部のメンバーの気持ちを揺り動かしたに違いない。

大切なパートナーであることを 医師も当然、わかっているはず

薬局薬剤師についての意見を求めると、「実際の仕事をよくわかっているわけではないので——」と前置きしながらも、「ポリファーマシーをなくせるのは、薬局薬剤師ではないでしょうか」ときわめて的を射た考えを示す。

「薬剤でもっとも問題になっているひとつは、ポリファーマシー。複数の医療機関に通って、もうご飯ぐらいに錠剤を持っている患者さんも少なからずいるのには驚くばかり。患者さんにとっても、医療経済においてもマイナスの要素しかなく、早急な解決が求められています。

しかし、残念ながら我々医師には、手も足も出ません。処方意図を理解しているわけではないので、他の医師の処方に対して意見は言えませんから。で

は、処方せんをもとに薬剤の説明を受けている患者さんが、問題意識を持つかと言えば、知識がないので無理というもの。

薬の知識を持っていて、患者さんにどんな薬が出ているのかを包括的に知ることができるのは、薬剤師のみ。誰かが権限を持って、ポリファーマシーにならないようコントロールをするとしたなら、その役目は薬剤師しか担えないと僕は考えます。そうした意味で、かかりつけ薬局の制度は、とても評価できますね」

けれども、かかりつけ薬剤師がいたとしても、その薬剤師が持っている知識をフルに活用し、さらには医師に照会しなければ、ポリファーマシーのコントロールは不可能。ぜひ、そのあたりを理解して薬剤師の皆さんには責務の大きさを胸に医師への問い合わせなど、薬剤師にとっては高いハードルを越えて行ってほしいと願わないではいられなかった。

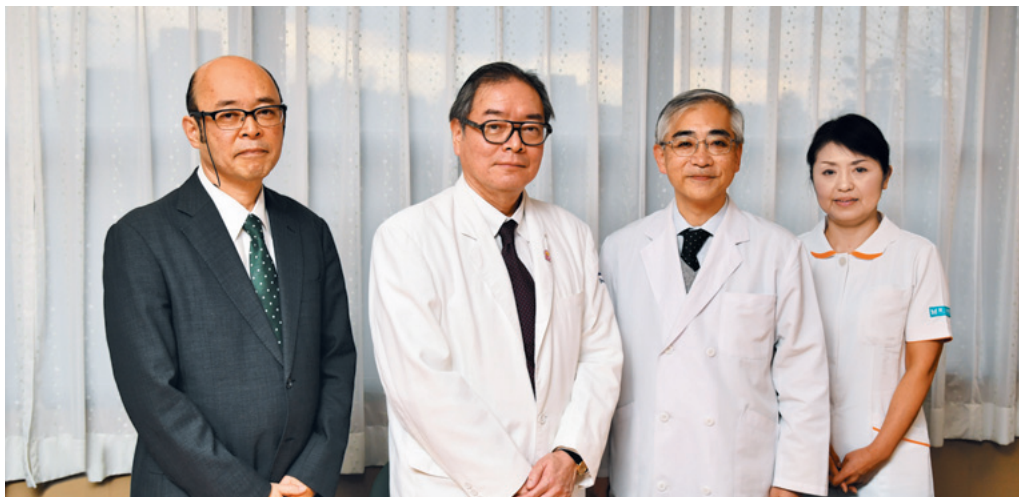
一瞬よぎった懸念を見透かすように、瀬戸氏は次のようなメッセージを薬剤師に贈ってくれた。

「薬剤師の皆さんには、医師にもっと意見を言ってもらっていいと思うんですね。言いづらい雰囲気はまだ残っているのも確かですが、そんなものは近い将来、なくなるでしょう。遠慮は無用。時代は大きく変わりつつあります。」

先ほど申し上げたとおり、膨大な薬剤の情報を医師がフォローしつづけるのは無理で、医師と薬剤師がお互いに対等な立場で意見交換ができなければ、それは、患者さんにとって不幸な結果にもなりかねません。薬剤師が医師のとても大切なパートナーで

あることを、医師もわかっているはずです。

僕は、確実に薬剤師には追い風が吹いていると感じます。ぜひ、患者さんのために、時代遅れになりつつある先入観や恐れなどわきに置き、薬剤師としての仕事をまっとうしてほしいと願います」



取材に同席してくださった皆さん。

左から塩崎英司氏(病院長補佐、事務部長)、瀬戸氏、鈴木洋史氏(薬剤部教授・部長)、長瀬幸恵氏(薬剤部副薬剤部長)

column

瀬戸氏の取材には、東大病院の薬剤部教授・部長の鈴木洋史氏にもご同席をいただいた。貴重な機会であるので、同院薬剤部と周辺の薬局との薬薬連携の実際や今後の展望などをお聞きした。

勉強会や懇親会を開催し 積極的に薬薬連携を進める

当院の薬剤部では、年に何回か、さまざまなテーマを設定し、近隣の薬局の方々にご参加いただ



薬剤部教授・部長
鈴木 洋史氏

けるような勉強会を開催しています。また、地域のいくつかの病院の薬剤師と薬局薬剤師の方々とで『薬薬連携協議会』をつくり、意見交換を行っています。さらに、使い方が難しいぜんそくの吸入薬の使い方などの講習会も開いています。

2019年11月に医薬品医療機器等法（薬機法）の改正案が可決となりましたが、これを機に、私たちとしても、薬局薬剤師の皆さんとの連携をいっそう深めていくつもりです。

薬局を拠点に多職種が 連携するシステムもあっていい

超高齢社会に突入し、在宅患者の数が増える一方であることを考えると、訪問による薬剤管理など、薬局薬剤師の方々の活躍が大いに期待されるところです。さらに言えば、地域の方々の健康、医療を支える存在の一部になっている薬局を拠点として、多職種が連携できるようなシステムの構築があってもいいと考えます。

また、患者さんに対するシームレスな治療が注目を集める中にあっては、病院薬剤師と薬局薬剤師との間での薬薬連携の重要性が、ますます高まっていくでしょう。

MY OPINION

—— 明日の薬剤師へ ——